

多角的なアプローチによる語彙指導

法政大学 飯野 厚

はじめに

語彙は語学力の最大の源と言っても良いほど重要な要素です。英語の基礎力として文法や音声の重要性も常に叫ばれていますが、語の存在があつてこそことばとして働きをもつこととなります。本稿では、最新の語彙習得の知見にもとづいて、高校英語における英単語の指導を考えます。なお、辞書指導には触れませんが、その重要性は明らかですので、現場の先生にお任せすることにします。

1. 「範囲内」から「上限ではない」とされた指導する語

まず、新学習指導要領の語数について確認しておきましょう。これまでの指導要領では、語数は最大値として示された数の「範囲内」におさえることが指導されてきました。しかし、新学習指導要領に関しては「上限の語数ではない」と明言されています（高等学校学習指導要領解説、外国語編）。具体的に見てみましょう。

「コミュニケーション英語Ⅰ」（3単位）
中学校 1,200語＋新語400語＝1,600語

「コミュニケーション英語Ⅱ」（4単位）
英語Ⅰ 1,600語＋新語700語＝2,300語

「コミュニケーション英語Ⅲ」（4単位）
英語Ⅱ 2,300語＋新語700語＝3,000語

英語Ⅰは現行と同じ新語数ですが、ⅡとⅢでは1年間に最低700語の新語を扱わなければなりません。これらの数字は文部科学省の方針転換を大いに感じさせるものですが、現場には常に「新語の導入＝定着」ではないという悩みがついて回ります。高校1年生においては中学校既習語1,200

語が定着しているかどうか、個人差は指導語数が増えるほど大きくなる可能性を秘めています。それに関連する問題として、中学校の教科書で扱われている1,200語が中学の教科書（6種）によって大きくずれていることを高校では認識しておく必要があります（相澤・望月, 2010）。

高校2年生および3年生は毎年700語以上の新語を学ぶこととなります。「コミュニケーション英語Ⅲ」が「リーディング」を継承していると考えれば、これらの科目の標準単位数（4単位）に変更はありませんので、大きな学習負担となる可能性があります。

2. 受容語彙と発表語彙

高校生は何語程度の語彙を身につける必要があるのでしょうか。「必要」と言う以上、読むための語彙、聞くための語彙、話すための語彙、書くための語彙、専門分野のための語彙など、語彙学習には方向性が求められます。ここでは、読んでわかる・聞いてわかる語彙としての「受容語彙」(receptive vocabulary)、話して・書いて使える語彙としての「発表語彙」(productive vocabulary)という観点から考えてみましょう。いくつかの研究によると日本人高校生の受容語彙は2,000語～3,000語程度といったところです。非常に限られた数の研究しかありませんので、この範囲以上の語彙を持つ生徒やそうではない生徒も当然いますが、標準的に考えるとこのあたりでしょう。発表語彙に関しては、一般に受容語彙の半分以下とされていますので、先ほどの受容語彙数を基にすると1,000語～1,500語程度となります。発表語彙は受容語彙に比例して大きくなるという研究もあれば、EFL環境の学習者は受容語彙数が少ない代わりに発表語彙との重なりが多いとの研究もあり

ます。この2つの説から語彙指導のスタンスとしてわれわれが取るべき方向性は、受容語彙3,000語を1つの目安としながら、できるだけ発表語彙に転化する機会を作り出すこと、と言えそうです。

3. 語彙指導へのアプローチ

語彙指導には、導入・定着・拡張という3つの段階が考えられます。これらの段階には多様なアプローチで臨むことが効果を高めることとなります。導入には、文字・意味・音声との並列処理的アプローチ。定着には、繰り返し（反復）による行動主義的アプローチ、再認や使用による処理のレベルを深くする認知的アプローチが有効といわれます。さらに社会構築主義的アプローチとして、反復、再認、使用などの課題をペアやグループで協働して行うなども有効と考えられています。拡張については、定着した語を軸とした語形成や意味のネットワークなど、心的辞書（mental lexicon）を拡充するための認知的なアプローチがあります。

4. リーディング中心の語彙指導

先述の多面的なアプローチを視野に入れながら、高校英語でもっとも重視されるリーディングを中心とした授業を想定してみましょ。その中で、受容語彙を増やしつつ発表語彙化を図る指導について考えてみましょう。

(1) Pre-reading: フラッシュカード（導入・定着）

人が単語を見たり聞いたりしたときに、どのように情報処理をするかを語彙アクセス（lexical access）といいます。単語を見て最優先される処理の要素は音声情報だといわれています。次に意味情報、最後に意味のカテゴリーにあたる品詞情報といわれています（門田・池村，2006）。これは語彙知識が貯蔵されている深さが音声＞意味＞品詞の順になっている可能性を示しています。これを応用して、文字・音声・意味・品詞の4つの要素を効率的に指導できる手段は、フラッシュカードではないでしょうか。中学校では定番の教具ですが、高校では意外と見かけません（個人的な見聞による判断ですが）。新語の予習を重視する授業形態であれば、授業の最初に予習確認

のために使えます。また、新語の予習なしの授業ならば、プレ・リーディング活動としてオーラルイントロダクションを新語カードを取り入れながら行うなども良いでしょう。さらに、単語の意味が絵やイメージになる事象であれば、和訳以外に絵などで意味を示すこともできるでしょう。

つづり→音声、つづり→意味・絵（+品詞）、意味→音声など、提示方法とそれに対する応答の要求を工夫することで、語の持つ多様な知識の定着を目指すことができます。より深い処理をとめた発表語彙化を図るために、新語カードをランダムに提示し、その語を使って生徒なりの英文を作って発話するか書かせるなどすることも可能でしょう。教室環境が許せば、PCや教材提示カメラなどの電子教具を使うことで、紙とマジックなどを使うよりも簡便にカードを作ったり、使ったりできるでしょう。

(2) While-reading: 生徒が自力で読む時間の確保（導入）

本文の読解を行う前に、新語を事前に指導したり、プレ・リーディング段階の発問をしたりすることは一般的ですが、大切にしたいのは第1回目の通読です。生徒が英文テキストだけを見て自分の力で黙読してどこまでわかるのか、体験させたいところです。その過程で、意味が想起できない単語に出会ったら鉛筆でうすくマークを付けておくように指導します。このようにすれば、事前に指導した単語が実際の読解で受容的活用ができるかがわかります。また、生徒によっては、教科書が示した新語以上に未知語が存在する場合もあり、教師がそれらを認識するきっかけにもなります。単純な方法ですが、生徒自らに、どの語がわかっていて、どの語がわかっていないのかを認識させるメタ認知的な能力の育成を目指した読解の時間を確保したいものです。当然、新語の事前指導を全くおこなわない授業スタイルでもこのような活動はできます。「自力でどこまで読めるかチャレンジしてみよう。意味が思い浮かばない単語には鉛筆で下線を引きながら黙読してみよう」というところから新語を導入していく切り口もあるでしょう。

(3) While reading: 英文テキストの内容理解とともに新語の定着

内容理解を確認する方法として一般的な手法は、和訳とQ&Aと言えるでしょう。和訳においては、1文ごとの和訳よりも、文をフレーズごとに区切って和訳することにより、直読直解に近づける方法が普及しつつあるように思います。Q&Aについては発問に対する解答の過程で読む文章の一部に、あるいは解答の表現の中に、適度な数の新語が入ることで、語彙の意味処理が深まり定着につながります。また、文章内容のサマリーや図表の空欄補充など、読みとった内容から必要な語句を書き込むような情報転移の活動(information transferあるいはgraphic organizer)も効果があると言われています。この3つの活動は、内容を理解しながら新語も扱うので認知的負荷は高くなりますので、本文の繰り返し読みを促します。結果的に、内容とともに単語も記憶に刻まれる可能性が高まります。また、答えを書いたり言ったりする中で新語を再生する作業は使用(発表語彙化)への橋渡しにもなります。

(4) Post-reading: 反復・再認・使用を促進する課題(定着)

新語を覚えるためにはどのような指導ができるのでしょうか。ここでは3つほど例として挙げておきます。

①単語リストの作成と利用(反復と使用)

新語のリスト(小型の単語帳など)あるいは暗記カードを作って、単語⇄和訳(スペースが許すなら、品詞情報や新語を含むフレーズなど含めても良い)の双方向の記憶テストを自分で、あるいはペアで何度も行うような機会を設けます。ペアならば、声に出す作業をからめて音声面の確認もできます。さらに、フラッシュカードのところで触れましたが、各カードの単語を使って英文を作って声に出して言う、といったペア活動などにすると定着を促進することができます。筆者の高校教員時代に、暗記カードを作る時間を授業中に設け、それを使ってペア活動やグループ活動をさせたことがあります。生徒は意外にも「初めて暗記カードなんて作った!」とか、「クイズ大会みたいで楽しい!」などとなにやら新鮮そうでした。

②出会った英文を何度も読む(反復・再認)

繰り返し読みは読解指導の基本ですが、再読を促す課題を与えて生徒自らの力で繰り返し読む主体的な活動にしたいものです。「語彙探索」(vocabulary search)の活動などは受容語彙の定着に有効だと思います。例えば、「絶滅の危機に瀕した言語」に関する題材を扱ったあとで、「ことば」や「数の増減」に関する単語をリストアップします。各自が判断した単語を見比べて議論するなどのペア活動にするとかなり盛り上がります。

繰り返し読みの課題としては、近年再評価されている音読が、語彙の定着という面からも有益と言えそうです。時間や回数あるいは読む際に注意すべき音声的特徴といった条件を設けた課題として、音読やシャドーイングをとり入れるとよいでしょう。音声情報も記憶に残りますので、聞く、話す状況に対応できる語彙知識につながります。音読の反復練習によって文字から音声に変換するための認知的な負荷が徐々に軽減され、意味にも注意力が振り分けられるようになるまで繰り返すことを指導したいものです。

③クロスワード、語義選択、空所補充、並べ替え、作文(再認・使用)

読解を終えたあとに、語彙に焦点を当てた課題を行った方がただ繰り返し読むよりも記憶に残るという研究があります(高梨, 2009)。これは意図的な学習(intentional learning)の方が偶発的な学習(incidental learning)を期待するよりも定着に有効ということです。また、課題の負荷(関与水準)によって定着の度合いにも差があるとされています。再認よりも再生、再生よりも使用(作文などでクリエイティブに)した方が関与水準は高くなります。したがって、文章を読み終えたあとにもう一度、単語に焦点をあてて何か課題を行うことは有効といえます。また、負荷の高い課題ほど記憶にプラスに働くと言えます。意図的な語彙学習は努力を裏切らない、と言えるでしょう。

5. 拡張

新語の導入、定着に関わる指導以外に語彙を拡張するための指導があります。紙幅の関係で2つだけ紹介します。

①語形成の知識を得る、活用する

語形成に関する情報を理解したり、それらを利用して意味を推測するなどの課題は、ある程度語彙増強に効果があると言われています。これは、語根 (root) の意味と、接頭辞 (prefix)・接尾辞 (suffix) の組み合わせから語の意味を導き出す方法です。基礎知識として、接頭辞と接尾辞における形式と意味のつながりを覚える必要がありますので、やや上級者向けの学習ストラテジーです。例えば、incredibleという語では、接頭辞 in-はnoとかnotの否定の意味であり、語根は creditで「信じる」の意味があります。語尾の -bleはable(できる)という接尾辞です。したがって「信じられない」となり、転じて「(信じられないほど) すばらしい」という意味になるなどと説明します。その後にさらなる例を示して意味を考える課題を与えたりします。比較的長い語に対して適用できる場合が多くなります。このような軸となる語(語根)とその派生語(接辞をともなった様々な語)をワードファミリーとしてひとくりにすることもできます。ファミリーの軸となる語を優先的に扱うことで、受容語彙をふくらますことにつながると言われています。

②意味地図で覚える

ある単語とそれに関連する語のつながりを、視覚的に示す図を作ったり、あるいは既成の図絵を利用したりして記憶する方法です。例えば、schoolという語に関連する語として、language, biography, social studies, principal, sick bayなど具体的な科目名や役職、場所など、想起できる語を英語にしてクモの巣状にして示すと理解しやすく、記憶にとどめやすいといわれています。また、野菜や動物、人の感情など、一定の範囲でつながりのある意味を示す語をまとめて提示します。語の集合が場面やテーマ別となるので、受容語彙の拡張はもとより発表語彙にも結びつきやすくなります。

おわりに

語彙指導に限らず、日常の授業は生徒にとって英語の学習方法を体験するワークショップと位置づけることができます。例えば、単語カードは

個人用フラッシュカードともいえますので、教師が授業でフラッシュカードをどのように使っているかという指導技術が、生徒がどのように単語リストを使うかという学習方法に転化する可能性があります。語彙学習に早道はないのですが、学びのコツを教えることは今後ますます教師にとって重要な仕事の1つとなりそうです。

【参考文献】

- 相澤 一美・望月正道(2010)『英語語彙指導の実践アイデア集』大修館書店
 門田修平・池村大一郎(編著)(2006)『英語語彙指導ハンドブック』大修館書店
 高梨芳郎(2009)『<データで読む>英語教育の常識』研究社

